

ロシア革命とアナ・ボル論争

— 山川均と大杉栄 —

秋 山 清

右の三つに要約して見せた後、それにつづけて「しからば共産党の優勢ということは、何によって説明されるか」といって、長い論述にはいつている。

山川はこのとき、独裁の事実を認め、その容認からさらにその必要を「これなくしては一日も現在の革命は維持せられぬ」と主張したのである。

アナ・ボル論争といわれるものは多方面の、あらゆる問題にわたる性格をもっているが、その焦点の「革命」についていえば、それは「独裁」を如何にするか、につきる。

独裁を必要悪として認めるか、認めないか。

認める場合、どの時点でその解消に向うのか。

絶対に認めないとき、革命をどのように現実化するか。現実化し得るか。

問題はここらあたりに絞られよう。

当時のロシア共産党は約六〇万、組織労働者七〇〇万の一〇％足らずであり、全無産階級に対してはほんの一小部分にすぎない、こ

1

いま私は、山川均の「ロ国は共産党の独裁か?」という、一九二二年「前衛」一月号、二月号の論文を読んだばかりである。これはロシアにおける無産階級あるいは共産党の独裁に向けられたいろいろの非難に、山川が逆の立場、すなわちその独裁といわれるものを擁護する立場で書いたかなりな力作論文である。

(一) 農村のソヴィエトにも、ソヴィエトの大会にも、批評家の諸説に反して農民の代表者が多数を占めていること。

(二) 共産党員は、大多数のソヴィエトでは少数である。したがって選挙干渉その他の方法によって、共産党がソヴィエトの多数を握っているという非難は、事実上反していること。

(三) それにもかかわらず、大体において、共産党の主張と綱領とが、事実上ソヴィエトの綱領主張となっていることは明らかであって、これなくしては一日も現在の革命は維持せられぬこと。山川は、共産党の独裁を云々されるソヴィエト・ロシアの現状を

の少数で幾十倍するロシアの民衆を指導し得るのは「共産党の主張と綱領とが民衆の要求を代表しているからであり、優秀な党の組織によるところが大きい」というオルギンの説をとって、山川は自分の回答に代えようとしている。その、優秀な党の組織とはどんなものか。山川のこれにたいする説明を今日読かえしてみても私は大きな興味を覚えた。それは当時における、党の姿と組織の新しく具体的な説明であつたと見えるからである。

「ロ国共産党の基本となっているものは細胞である。工場でも事務所でも農場でも三人以上の共産党員が一緒にいる場合は細胞(ヤチカ)を造らねばならぬ。ロシア全土はこの細胞の点線を縦横に引きまわされている。工場、事務所、軍隊、学校、鉄道、村落、このどこにも必ず在る。(そこでヤチカハ細胞Vという言葉は共産党の基本団体をさす専用語となっている)細胞は共産党員を職業に従って団結する組織となり、共産党は民衆の肺腑にまで衝き入ることが出来る。細胞の任務は、これによって党員は日々の労働を共にしている民衆の心理や要求や感情を知り、党の主義を実行する機関となる。」

「すべての共産党員は、その地位、仕事の如何にかかわらず細胞の一員たるべきこと。チチェリン氏は外務省の細胞で一掃除夫と同様にその集会に出席し、トロツキーは軍隊の細胞に一兵卒と同等の権利しか持っておらぬ。故なく毎週の細胞会議に二回欠席すれば党を除名される。集会での討論は絶対自由、労働者とインテリゲンチヤ、指導者と平細胞員との間にも区別はない。」

「細胞が工場や事務所で優越な実力を持つ理由は(一)如何なる問題にも明確精密な綱領を持ち、綱領の実行を各細胞員は義務と信

じ、(二)内部の意見衝突も、外部に対しては完全な一致を保ち、(三)党の中央機関が常に細胞の意志を尊重してこれにしたがうこと。」山川の党—細胞の在り方を説明したものを要約すると右のようなことになる。これがその発表された時においては、非常に魅力に満ちた説明だったことを私はうたがわぬ。と同時に山川の力説にもかかわらず、独裁者が党がないことの説明はなお殆んどつくされたい。とはいいたい。

われわれは、非合法下の日本共産党も、このような山川の説明のように組織されようとしたことをうたがわぬが、ロシアにおけるように全地域、全産業の中にそれが組織され得なかったことも知っている。政治事情に全く異ったロシアの組織を共産党を非合法としたわが国で真似たことの必然な落差がこの時山川によって説明されなかったのは、ロシアの組織がわが国にやがて組織されようとしたものの見本であつたのだと理解すれば、それは納得されることではある。

山川のいうように、革命後のロシアは、民衆が次に来るべき国家の新しかるべき組織に大きく期待したであらうし、民衆はまたその国家において、自分たちが主人公たるべきことを当然だと自負してもいたであらう。その国情における民衆と党細胞との関係は、当初ある明るいものが望れたことも否定し得ないことであらう。しかし、山川の力説にもかかわらず、細胞を下部組織とする全国的な党の在り方は、それは二重な独裁的性格を、そもその出発から孕んでいたものである。

しかし、革命を成功し得たロシアにおける党と細胞、その民衆にたいするリーダーとしての、または支配者としての性格は、党と革

命の指導者レーニンの思考の中に確乎として存在し、だから共産党の方針として党を国家の隅々にまで、民衆の中ふかく、ひろく、存在させるという組織づくりの深底に、支配の理念がなかったなどと考えることの方が迂闊ではなかったか。

地域と産業内部の末端の党組織としての細胞から、それが集まってきたの地域組織としての支部、あるいはさらに別に細胞の上に存在する市邑委員会（これ以上が截然たる党の組織）では、所属細胞をうごかし、市邑全域の党員会議をひらく。かくして大都会でこの集会に数千人が参加するとなれば、その党勢力がその都会、その地域を圧するに足る勢力となることは誰にも考えられねばならないことである。だから山川が、(一)でいったように、「農村のソヴィエトにもソヴィエト大会にも批評家の所説に反して、党員は大多数を占めない」としても、その支配勢力は莫大となる、と見ることの方が常識である。それが山川によって常識に反してとらえられたのは、すべて「革命」によって人心が一新され、民衆が善意によって社会を前に押しすすめようとするものだ、という希望的観測に立ったのでなければ、独裁支配を予測した組織と承知しながら、全民衆のなかの少数という事実にかくれて、はじめからその成行をひたかくししようとしたことに他ならない。

にもかかわらず、革命ロシアにおけるこのような党と細胞の在り方が非常に魅力をもってわが国の労働者や左翼的なインテリゲンチヤをとらえたであろうことは、ここに少数が多数を制する組織のテクニクがかくされていたからである。たしかに革命後といえども共産党員は国民大衆の十分の一を出でなかったであろうが、細胞組織は、その少い党活動者を民衆の中から民衆の先頭分子、指導分子

として掲げ上げ、地域、職場のリーダーたらしめるのみならず、そのリーダーにたいしては党幹部の指導が省、市邑等の委員会、すなわち純然たる党組織を通じて間断なく行なわれるのである。

ここに革命を遠望して垂涎する日本の社会主義者がいる。その革命の国に、党勢力を表面民主的に、内実は支配的に抑える組織が、共産党の方針として樹立されている。世界の赤色革命を指導せんとする機関がロシアに設けられてこの「党と革命」の方針にのっとって指導するとき、日本の弱体なマルクス主義者たちがこれに憧れ、信頼し、無批判的にとびついたとしても、あえてとがめるには当らぬことかもしれない。

クロボトキンがいったという、ロシア革命は如何に革命をしてはならないかの見本である、とかいったというそのことの正しい意味は、革命後の社会を一党が独裁的に支配するよう組織された「国家」としたことを指すものである。山川の「ロシアは共産党の独裁か？」は、その然らざる旨を、ロシアの党組織の在り方を説明し紹介しながら語ろうとしたものである。そのとき山川は、ロシアの党の説明に前記モサツィエ・オルギンの紹介にことごとく頼っており、次のようなことが細かく紹介されている。

「省委員会の活動ぶりの一班は、つぎの数字によっても知ることができ。モスクワ省委員会の婦人部では、一九二〇年の八月中に一回の省大会と、一六六回の大会と、一三回の講演と、八五回の談話会と、三六回の代議委員会と、二回の主婦会と、二六回の組織者会とのほかに、他の部門の代表者を加えた連合協議会を三回、婦人部委員の会合を九七回、その他の会合を一三三回開いている。これはすべて一カ月間の会合であり、しかも婦人部だ

けの活動である。またニジニ・ノヴゴロド省の片田舎、アルギマスの県委員会では、一九二〇年の六月中旬に、三七七回の大集会と七〇〇回の談話会と七回の大会と一〇回の講演会を開いている。これだけの活動をしたアルギマス県には当時幾人の共産党員があったかという、僅かに四五〇人であって、そのうちで主として働いたのは八〇名にすぎぬ。そして革命以前には、アルギマス県ではかつて一回も講演会の開かれたこともなく、民衆の集会などは夢にも聞いたことがなかったのである。

これらの集会では、共産党の学説や綱領も無論宣伝はせられるが、一般知識の普及を目的とするものが少なくない。」

私はこの、ロシアにおける党の委員会活動の紹介を読みながら、二つのことを同時に思った。この活動は文化度のひくかったロシアの各地域に、革命の事業として当然必要だったと同時に、その民衆、文化度を引上げることがすなわち党勢力拡張の仕事であったはずだということ、これが一つ、ここで働いた共産党員の数が甚だ僅かであったということは、民衆にたいする党勢拡張の仕事が自由自在な地域であったことの証拠に他ならない、これがその二つ、である。

つまりかかる説明は、革命後に共産党が如何に努力して全国的にその党勢をのぼす努力をしたかということの説明にはなつたとしても、独裁ではなかった、そうではない、ということの説明には小指ほどもその足しになるものではない。むしろ如何に党勢拡張を通じての独裁的支配が、かつて講演会もその他の集会もひらかれなかった地域での活動が、革命の指導者としての党にとって、安らかであったかを語るにすぎないと私には考えられる。

工場の労働者の中につくられた小人数の党細胞が如何に、無組織の民衆の中で猛威をふるうことが出来るものであるかということ、太平洋戦争後二、三年のわが国における、かの産別組織の急速な出現を回想することによって、誰にもうなづけることである。そのとき決して日本の労働者農民やその他民衆の中に、日共の勢力は強大でも何でもなかった。しかし、暗々裡に伏在した妄想としての日共は大きかった。二、三名の代議士しか持たないのに四大政党の一つなどと豪語してそれが罷り通ったほどである。産別の組織が急速に拡大し、それを支配するが如く共産党が見られたのは、産別組織の全員が日共党員か、その支持者であるかのような錯覚が、そこに生じていたからである。

これは皆、労組の中にはいつていた一部少数党員の党活動、すなわち細胞の力によることであつた。私はこの回想を、山川が紹介したオルギンのロシアの党活動の説明と重ねて、ともにそれが一つのポイントにおいて見事に重なり合うものであると考える。一つのポイントとは、疑心暗鬼的な、形を定かにしない細胞の存在を根底とする党の仮像の巨大さである。この仮像に眩惑して、アナキストであったはずの私の戦前の仲間や同志たちは、臆くもマルクス・レーニン主義へ挺身転向したりしたが、そのことは、如何に戦後のわが国で、この党の仮像が天空を圧する革命的勢力と見えたか、ということを示しつづけるものである。このことは、そのままオルギンが語っているニジニ・ノヴゴロド省やアルギマス県の、少数党員の活動の成果の大きさ、ということとその実体の解釈とに重なるのである。

「共産党員が要職に選挙されるのは、何よりもまず、彼らの驚くべき組織によるものである。そして第二には、反対者の性質、第三には、民衆一般の気分によるものである。共産党員は一個有力な、訓練を積んだ、完全に一致した力に組織されている。」

「反対党（共産党に対する）の主張は現在のソヴィエト制度の破壊を意味している。そこで共産党を支持するか、反対派を支持するかということは、現在のソヴィエト制度に立脚した二つの相反した政策中、どちらを選ぶかということではなくて、現在の制度を選ぶか、それとも現在の制度を破壊して昔に帰るかということになるのである。」

「多くの人々は（革命後）方向に迷っている。革命は成功し未来は輝いている……しかし現在にはかつて見ざる艱難がある。しかし彼等にはこの難関に処すべき積極的の意見がない。——そして思慮あり活動的な何人かが責任の地位に立たねばならぬことには何人も異論がない。この種の人物は、共産党以外には何処にも思いつくことができぬ。民衆は共産党の綱領に実現の望みがあるという確信を抱いてはおらぬかも知れぬが、きりと彼らには、実現不可能だという確信もない。彼らは、もとより反革命を欲しない。そこで彼らは政府の責任を共産党の肩に転嫁して、うまくいったら恩沢に浴し、まちがえば非難しようとする……。」

このように、オルギンの言葉を引用して山川はこうつけ加える。

「かような理由と形勢との結果として、共産党の綱領は自然に

この「しかし」をきっかけに、もう一度談に花が咲いた。生産者のディクトートル・シップという思想は、早くからアナキストのうちにも唱えた者がある。地方地方におけるソヴィエトの執政はよい、しかし地方のソヴィエトの権力を集中して、中央政府をつくったのが悪い、ボルセヴィキは秩序の回復を急いだために、もっと進展するはずの革命を縊り殺したのだ、外国の武力干渉に對抗するためには、バルチザンで沢山だ、赤軍の必要はない、要するにロシアを革命状態においたまま、もっと攪き混ぜておれば、クロボトキンの理想通りの社会が実現せぬまでも、もっとよい社会がその中から生まれたにちがいない——これが大杉君の結論であった。」（『改造』一九二三年、大杉栄追想特集）

この対話をした彼らの会見は一九二一年であったと山川はかいている。そして山川が「ロ国は共産党の独裁か？」を聞いたのは同じ年の一月である。二人の対話の焦点の一つが「独裁」であり、今一つは言葉として語られてはいないが、地域政治における民衆の自治能力の上におかれている。その時「地方のソヴィエトの権力を集中して中央政府をつくったのが悪い、ロシアを革命状態のままに置いて、もっと民衆のやりたいことをやらせれば、クロボトキンの理想社会に近づく」といった大杉の、アナキストのみが為し得る発想に私がつく共感を覚えることはいうまでもないが、このときの二人ほど、近くいて、遠くはなれた存在はなかったであろうと私は思う。たしかにかつては同志であり、今も日本政府に圧迫される左翼仲間ではありながら、なお親しい言葉を交しながら、ロシア革命を挟んで、一八〇度の、無限の彼方と此方に彼らはいらる。ともにその、人間の平和で自由の社会を望むことにおいて一つでありながら、互

民衆を指導し、少数の場合にも、彼らの主張はよくソヴィエトを支配する。そしてソヴィエトの執行委員や各部門の委員の選挙の場合にも、多くは共産党の候補者が当選する。殊に全国・ソヴィエト中央執行委員会では、共産党員が多数を占めているので、共産党の決議は必ず採用されるのが常である。

これを共産党の独裁というならば、たしかに共産党の独裁ともいうことができる。しかしこの場合「独裁」とは、選挙干渉や、脅迫や暴力による支配の意味ではなく、行動と説得との力による、最も理想的な意味での指導であることを忘れてはならぬ。」この言葉は、私にとって、ある回想を強めるものであった。アナキスト大杉栄とのある対話について山川均自身がかき残した一つの記録である。山川均はその若い日に友人と号したこともあるなどといわれており、アナキズムにかなりの造詣がなかったわけではない、ということをおバックにして、二人の次の対話とそれに伴う山川の回想を思うとき、そこには大きくふかく、現在にまで及んでわれわれを示唆するものがある。この会話を私は他でも引用したことがあるが、ここでもう一度これを顧みることを読者は許していただきたい。この二人のすぐれた社会主義者の、共通した面と、対立した面を知るばかりでなく、ロシア革命にたいする、わが国でのきわだった反応としてこれは貴重な言葉である。

「一たい、クロボトキンが『パンの略取』の中に描いたようなあんな理想的な社会が革命後にすぐ実現するものだろうか？ 君はどう思う？ すると思われるかい。」（山川）

「無論、しないにきまつているよ。」（大杉）

「ウン、僕にもそんな気がするんだ。しかし……」（山川）

にクロボトキンの理想の社会を思いながら、このように離れた目で現実を見るとは一体、どうしたことであろう。

その理由は、つづめていえば、革命後の独裁を認めるか、否か、にかかると。

山川は前述のように、オルギンの説によりながら「共産党の独裁」が、選挙干渉や、脅迫や暴力による支配の意味ではなく、行動と説得との力による、もっとも理想的の意味での指導である」といって、堂々と党の独裁を認めている。彼は独裁に至る手段方法の如何というのを「独裁」の問題にすりかえている。民衆が承知なら「独裁」がまわぬということである。「独裁」が民衆にとって、あるいは政治の問題として、平和の問題として、それはかわりないというごくである。独裁を獲得する方法については山川は考えたかの如くであるが、独裁がやがて民衆にとって如何なる運命を遭遇せしめるかという思慮（それこそ独裁の問題の本質である）はまったく欠如している。いいかえれば、「ロ国は共産党の独裁か？」で山川の主張するところは「民衆に支持されている共産党の独裁は当然である」ということに尽きている。山川のそこで説くところは、民衆の生活の場における細胞の在り方から説いて、それはいかにも民衆の思いと信頼に応えるものであるかのよう語りはじめられたから、ゆきつくところは「独裁」の政治的許容、否、それは独裁の確保の主張に終らざるを得ないものとなった。このことは、ロシア革命史を読むときも、日本の共産党史を見るとともに、われわれは肝に銘じておかねばならないことである。党の組織、革命のための組織の大本は、いつも「独裁」の権力の樹立、確立という一点に集中するという動かしがたい歴史とその哲学とがここに厳然と、存在し

つづけているのだ。

だから、いっそう私は、山川が大杉の思い出の中でした、さきの回想に、さらにつづけて書いている彼等の言葉のやりとり、忘れることのできない興味をもった。

「そのときから（さきの会話のときから——秋山）一年以上も大杉君と逢わなかった。今度も談はいつのまにかロシア革命にうつっていった。今日はこれから仙台まで往くんぞ、こういって大杉君は立ちあがった。

「しかし、僕らがロシアにいたら、大体において、まああのようによったろうな。」

大杉君は外套のボタンを掛けながらこういった。

「そうさ、君がああ時、あの人たちの代りにロシアにいたら、精密に同じことをやったらうな。」

「ナニ、精密に同じことはやらぬさ。プリンシプルが違ふから。」

「そのプリンシプルというヤツが、減多に当てにならぬヤツでね。」

減多にあてにならぬヤツでね」と大杉君は口まねのようにくりかえした。——」

3

私は数ある大杉君のすぐれた言葉の中でも、山川均によって伝えられたこのときの語り口がなかなか忘れがたい。同時に大杉君をかくも見事に、その姿態から言葉、革命的思想をまで浮き彫りにしてわれわれ後進に残してくれた山川均に感謝しなければならぬ。

大杉君が、あの時ロシア革命の渦中にいたら、どのようなことを為そうとしたであろうか。それを思う前に、われわれは大杉の民衆にたいする信頼をこの言葉の底から汲み上げねばならないのではないか。

すでにそこには、ロシア革命の勃発時における民衆の自由の発動にたいする革命的信頼を遠く寄せていた大杉君がいると思う。レーニンは、クロンスタットの水兵たちを「革命の花」とたたえたが、それは権力に恐れず彼らが革命のために、党などの命令によらずして立ち上ることのできた反逆的な精神と活動に對してであった。その同じクロンスタットが独裁の政府者となったボルシェヴィキにたいして再び自由を要求したとき、共産党ロシアは彼らを革命の敵として砲弾を打込んで彼らをセン滅した。ここには「民衆が自治を要求する」ことを認めがたい独裁者の政治のみがある。クロンスタット水兵の蜂起が、かつては革命の花であり、やがては革命の敵であったということで、裁かるべきはレーニンであり、トロツキーであり、ジノヴィエフでなければならぬ。ロシア共産党でなければならぬ。如何なる手続を経たのであるとしても、彼らの、あるいは山川がいったように民衆に支持されて選ばれたのであったとしても、かくの如き独裁のいつわらざる白日下の姿を見よ。革命後の混沌の中に、あるいは民衆がその必要を望むことがあったのだとしても、独裁政治は、また一党の独裁は、どこまでいっても、その「独裁」そのものの権力の性格から許されるものではない。日本の革命指導理論家山川均が、このような独裁を認めざるを得なかったのは、彼の大杉との会話におけるように、革命直後に理想社会の出現が不可能と見たことに由来するとしても、理由はそればかりではない。

い。革命に成功した国と民衆の理論にたいしてではなく、その革命の権威に彼が頭を下げたということではない。彼は、細胞によって下から盛上げる党勢力の、大衆にたいする牽制と瞞着の中にふくれ上がる組織——支配的組織の拡大のなりゆきを、オルギンの説明と紹介の中に十分に見つけているのである。少数の党が、生産の場面において、地域社会において、如何に民衆をその支配下に置いてゆくか、その経路をも熟知したはずである。しかも山川はなお、ロシアにおける党について、非難される独裁について、独裁の現実政治における力の圧迫に目をとめることなく、その選出と中央集権の盛上りを、単なる手続きの問題として、あくまで擁護し、主張し、賞賛したのである。

ロシア革命が、革命を成功させた者が民衆——労働者、農民、兵隊たちであったという民衆の立場から為されなければならない評価をなおざりにして来たのは、このように一党の独裁を合理化すること、まったく表裏一つのものであったのではなかったか。

山川はまた、同じ文章において「デモクラチックの集中」ということをかいて、党活動の源泉細胞活動のなかに、真のデモクラシーが確立しているとして次のようにかいている。

「ロ国共産党の活動の源泉が、『細胞』にあることは前述の通りであって、党の中央機関——全国執行委員会——が強大な権力を持っているのも、要するにそれが『細胞』の意志と活動とを代表し、集中した、焦点だからである。『細胞』は行動力のない有名無実の組織ではなくて、自主的、活動的な細胞員の小集団であって、その内部には真のデモクラシーが完全に行われている。」

「全国執行委員会は、党の各部の活動を奪って中央に集中し、かくて党の部分部分が活動を奪われているために、中央の執行委員会に強大な権力があるのではなく、中央機関の権力は、各部分の活動が基礎となっている。いわゆるデモクラチックの集中がロ国共産党の組織の標語であって、各分子の最大限度の活動と、この活動の統一と集中という、二つの効果を収めようとするものにほかならぬ。」

「『細胞』には最大限度の活動の余地が与えられてあると同時に、『細胞』の意志によって成立した全国執行委員会の決定には、黨員は絶対に服従する義務がある。『細胞』の集会では、細胞員は意見をたたくことが絶対に自由であるが、ひとたび決定した『細胞』の決議に對しては、細胞員は絶対に服従の義務があるように、党内には時として意見の衝突をまぬかれぬか、執行委員会の票決は、常に決定的の力がある。」

と、山川によるロシア共産党の運営と組織のアウトラインが示されたとき、わが国の革命的なインテリゲンチヤや労働者が、進んでこのような組織とその運営に自己を投じて悔なしとしたであろうことをうたがうことはできない。大正末から昭和初頭における日本共産党の、目にはしかと見えないがらの活動力は、かつて見なかった革命の勢力として日本国民の情緒をゆりうごかしたものである。たしかにその描かれた革命の党の絵姿は整然として見え、票決による党決定の絶対性と党内デモクラシーの精神は、矛盾するところなく組織され運営されているかの如くに見えるものであった。

しかし、われわれは多数の国民、民衆の中における少数の党の姿ばかりを美しく描いてたのしんでいるわけにはいかない。党は、国

家の中において、国家をうごかす唯一の力として革命のロシアに存在したのである。大杉がいつのけたように、革命が起った後、今すこし民衆が自分の革命を自分の好みに合わせて料理し、味わう時間が彼らに与えられたら、もう一歩も二歩も、レーニンがいつたよりもいくらか早く、無権力、無支配の社会に近づくことができなかつたであろうか。すくなくとも今日のソ連邦その他のいわゆる社会主義国家における民衆よりも、ずっと強烈に、そして明るく、その未来への夢を抱きつづけて、革命国の現在に生きることができたのではなかろうか。われわれは国家のなかに閉じこめられている。国家とは何ものか。アメリカのデモクラシーとソ連の社会主義と日本の資本主義とスペインのファシズムが、甲乙なくその中に存在し得るものことである。

世界のボルシェヴィキと世界のアナキストが、地平線の向うに行つてまでも争わねばならないのは、権力、就中その国家権力というヤツである。山川均と大杉栄が、一九二二年、二年の頃に、ロシア革命を挟んで対立したのは、山川は国家について、それを在るべき社会の必要なるものとして、大杉は絶対的にそれを排撃すべきものとして、相容れなかつたということによつてであつた。

「あのとき君がロシアにいたら精密に同じことをやつたらう」、「ナニ、精密に同じことはやらぬ。プリンシプルがちがうから」といいあつた、あのプリンシプルの意味を、そのときから五十年の後の今日、私はそれを、国家あるいは国家権力にかかわるものとして見ようとする。そうすることによつて、「精密に同じことはやらぬ」というその「精密」の意味を、革命のなかに行使されることのあるたう暴力などというものを超えて、国家権力の奪取を狙う

か、それと逆行するかの問題の上において、そのことを私は考えた。

レーニンは危惧しなかつたのであろうか。細胞からこねあげて見事に樹立した政府、その国家支配の権力、その権力の自守本能が、もつとも革命の精神を虐殺する存在となつて、革命は後退し、ナロードニキ以来の人間平等の夢を見る者が、ついに革命国家から反逆者とし、反革命として粛清される以外の道が失われるものであつたことを。山川の党組織の説明がくわしければくわしいほど、そのある新しさに血気の青年たちが飛びつければ飛びつくほど、それは恐るべき陥穽を伴つていたことを、俊敏な理論指導者が思い見なかつたのであろうか。

ボルシェヴィキは、その革命の担い手はプロレタリア階級だという。そういうことによつて彼等は自ら大きな矛盾の陥穽の中におちた。一九二二年八月の、全国労働組合総連合の創立を妨げた彼らの理論の根底には、労働者が自分ら階級の解放のために自力で立上ることを恐れるものがあつた。労働者の解放は党の指令によらねばならぬ、というテーゼをひそめてのその創立大会で、彼らの多数は自主的革命的な労働者勢力を分裂せしめることに全力をつくした。そして反革命的な労組と労働運動がわが国を風靡して、戦後の革命的な時をも逸機せざるを得なかつた遠因ともなつたのである。

(一九六七、一一、一五)

わが未開化と対決

——秋山清詩集『ある孤独』について——

清水清

戦争があればいい、とさえ私は思う。戦争がはじまれば太平洋戦争時代のような民衆が浮き足だつた中で、自分自身をもう一度省られるだろうと思うからである。もちろん反戦を叫ぶだろうが、一億一心、反戦と平和をかつぎまわつたあの時期と打つてかわつた有様が想像される。もう一度孤絶の思いの底で、自分を見直したいということである。私は人をほとんど信用していない。私自身にも不信をかこっている。あやふやなのだ。社会のため、人類のため、民衆のため、そんなのはまっぴらだ。そんな名目でなら戦争がやれる。自分のため、おのれ一人のため、そしておのれのことさえ侮蔑しつづけた時、そこまでくらは行きたいものである。

一九六七年八月二八日午前一〇時からの約一時間、東京地裁の七〇一号法廷に展開して、新聞、ラジオ、テレビがほとんど前例のなかつたことと報じた、十人の被告といくばくかの傍聴者が、黒旗を立て、ウタをうたい、意見を述べ、どこよりもそこに秩序が正しく存と思われていた裁く権力と裁かれる恭順が、見ごとに逆転したとき、私のなかで孤独感のようなものが霧散していた。

孤独の時だけが、過去では私を保証してくれた。その逆のとき、私はほとんど埋没していた。そのことの新たな逆を今日以後私は切望しなければならぬ。

○はじめの文章は、詩誌『コスモス』の、第三次復刊号(一九六二・秋)に載つた「雑

記」の一部、あとは、詩集『ある孤独』のあとがきのあらかたで、いずれも秋山の文章である。ながながと引用したわけは、この二つの文章を重ねて読むことで、秋山清の三番目の詩集『ある孤独』の意味は、秋山自身がほとんど語り尽していると思うからである。

主体性とか、個性という言葉は、こんにちでもやはり言葉のようなものだが、戦後の日本では、詩や文学の世界ばかりでなく政治・教育から社会問題のジャンルまで、それを持ち出さなくては、議論にも話にもならないようなかつこうで、はやつた。新聞でもいいし、雑誌でもいい。そのつもりで見れば、この種の論議は、毎日繰り返されていく。だが、それらの論議の不思議さは、主体とか、個性というものの中身については、自明のことであるかのように、どういう内容の主体、個性であるかを、まったくかえりみない、いわば、自分すなわち主体、おのれ即個性という種類の、ある意味では、たいへん素朴、単純で、自信に満ちたものですらある。太平洋戦争時代の左翼詩人たちの、戦争協力者への転向、さらに戦後の民主主義への再転向、いわば多

数から多数への経路は、置かれた状況を十分に思い合わせるとしても、主体性の中身、つまりその精神構造の問題をぬきにしては考えられない。秋山は、彼の最初の著書『文学の自己批判』の中で、戦後民主主義文学の混乱、虚偽、無責任さを追求、実証しながら、そのあとがきに次のように書いている。

「その人の思想や主張がどのようにあらわしく、いわれる進歩的のものであらうとも、その人間内容は必ずしもその水準に密着するものではない。しばしば、それはイデオロギーよりもはるかに後進的であるか、おくられている部分が一人一人の人間のなかには多くのこざれている。」

「——そこで何よりも痛く身にしみたのは、われわれ自身のなかの、抜きがたく未開化で、非民主的な、感情と習慣との強大ということであった。文学運動の目的がそこにありながら、その追放がまったく容易でなく、人間改造の困難さをあらためてわが身と周囲に目をひらいた。」

『文学の自己批判』が刊行されたのは一九五六年一〇月だが、この本を書く過程で詩集『ある孤独』は、すでに秋山の心情に

形成されていたといえる。『ある孤独』に収めた三十五篇の、年代の一番古いものは一九五七年代の「プラタナス」はか四篇だが、彼のはじめての詩集『象のはなし』（一九五九・七刊）の終わりに収めた「われをばげます歌」（一九五六・二）には、ある孤独がはじまっている。秋山のそのような心情の形成は、もちろん、文学の場の、うすきたなさのみが主要な役割りを果たしたわけではない。『ある孤独』の詩の書かれた一九五七——一九六七の、十年前前後の現代史の主な項目を、新聞から粗雑に拾い出してみても、次のような状況がある。

- 一九五四〇ビキニ水爆実験、死の灰事件。陸海空の自衛隊発足。
- 一九五五〇砂川の強制測量で反対支援団体と警官隊の衝突。米軍、北富士演習場の実弾射撃通告、地元民と警官隊衝突。
- 一九五六〇砂川第二次強制測量、双方に一一五一人重軽傷。ハンガリーのブダペストで暴動。スエズ動乱。スト規制法存続決議案成立。
- 一九五七〇誘導弾エリコン横須賀に揚陸。日米安保条約改定交渉はじまる。

一九五八〇キューバ革命。安保改定阻止第一次全国統一行動。空対空ミサイル・サイドワインダー立川基地へ入る。国会周辺のデモ規制法案、自民党単独採決で衆院通過。

- 一九六〇〇安保条約、行政協定改定交渉妥結、ワシントンで調印。国会に五百人の警官を入れ、自民党単独で新安保採決。羽田でハガチ事件。安保阻止デモで東大生樺美智子死ぬ。浅沼稻次郎右翼少年に刺殺される。国民所得の倍増計画発表。
- 一九六一〇第七回原水禁大会で原水協分裂。アメリカから地对空ミサイル、ナイキ・アジャックス到着。
- 一九六三〇警官の十八万人増員さまる。南ベトナムのクーデター。ケネディ暗殺される。
- 一九六四〇南ベトナム再びクーデター。第一回生存者叙勲二〇一人。

一篇の詩であろうと、百篇の詩であろうと、もともと詩などというものは、現実の力関係の上では、非力なものである。ながながと見てきたような、日本の現代史の中

では、その体制の側にいない限り、詩人は孤独であり、自己隔絶を強いられざるを得ない。秋山が、自分の坐ったその位置から現実の局面と向き合う、そういう姿勢でなく、現実の中に自分をおき、現実と対決して、自分自身とも対決してゆく方法が『ある孤独』を通してとっているのは、そういう方法こそが、主体の中身の改造につながると思ったからであろう。いってしまえば、ごく当然のことではあるのに、一冊の詩集の姿勢が、そのままその詩人の生き方であるということは、現代では稀少価値である。『ある孤独』の、書かれた詩の重さより、それははるかに重い。毒にも薬にもならない詩と詩人の流行するこんにちの詩ブームといわれる現象とは、まったく無縁のところのものだ。

やっぱり

おれの負けか。

予期していてもそうときまつたときの

やりきれなさは

がまんが骨が折れた。

おれの顔は怒りのために

あおく、くろく、汚れただろう。

もう何も信ずるがものはない。
立ってひろいアスファルトの通りをみて
いると

そこが凹んだりせりあがったりした。

おのれひとり

ささえるのが精いっぱい。

立っているのがようやくだった。

街路樹の濃いみどりの繁りがいやらしく

手をひろげたプラタナスが

風にひらひら嘲っているのだ。

足はおれと反対の方向にあるいて行こう
とあせっていた。

失敗はしれたこと。結果はこれからもつ
とひどくなるぞ。

遠くの方ですくすくようにみているのは。

おもし足どりをかざしているのは。

人のなかにまじって、にやにやしている
のは、おれだ。

あざわらっているのはおれだ。

なぐさめてなどやらぬのもおれだ。

おれだ。

おれだ。

おれだ。

おれだ。

おれだ。

おれだ。

おれだ。

おれだ。

おれだ。

（ひみつを知ってるやつにやかなわね
エ。）
——プラタナス——

詩集の発行は前後しているが、戦争期の詩をあつめた『白い花』の、対象の写実を確実に行なうことによって、その底に詩人の批評精神をひそませる彼のリアリズムの方法は、『象のはなし』の終わりが、一九五六年ごろから、外部事象の描写より、自己内部のもの、観念とか、心象を捉える詩風に徐々に変化して、『ある孤独』も最近になるほど、それは顕著になっている。つまり、外部事象の動きと、内部世界のそれに対応する動きを、重ねて描き上げる方法である。方法として、それが新しいわけではないが、彼の、ものを正確に把握する写実の長い習練が、内部世界を書く上にも、たしかな目を定着させている。この詩集に収められたベトナム反戦の詩「夜と昼」、百行にも及ぶ長い「ある孤独」（戯編一九六七）は、その意味でも重要な作品だが、ことに「夜と昼」は、観念的な罪悪感や、体験的な戦争忌避感で、甘っちょろい反戦詩のはらんしている今日、反戦詩というもののあり方を考えさせる、いわば詩による問題提起としても重要である。

（東京・中野区警官六の八の二八 東京コス
モス社刊・五百円）